
盗賊と王女の怪奇譚

じれったい明け烏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盗賊と王女の怪奇譚

【Nコード】

N4027B

【作者名】

じれったい明け烏

【あらすじ】

ある日国王が心変わりし、以来圧政が続くようになった国、バテイーラの王都ベグナスを舞台に、およそ人助けをする様な柄でもない名つての盗賊デイルドレンが、王宮から逃げ出した国王の娘パールバティーを助けて宮廷に潜む事件に臨む。

プロローグ

王都ベグナスの空は気持ち良く晴れ渡り、立ち昇った陽光が燦々と降り注いでいる。常ならば朗かな心地良さを抱く日となったであろう。

ところが、美と慈愛の女神ティアの祭られる神殿を前に少女の心は晴れぬまま。それもこれもここ数ヶ月、父の様子がおかしいからだ。娘たる自分に対する接し方に温もりが感じられない、というだけでない。

父は一体どうされたのだろう、と少女は心を痛めていた。

女官長と侍従達を従え、王宮の敷地内にある神殿を訪れた少女は今、女神ティアに問うつもりだ。心神深い彼女からすれば、女神の慈悲にすぎるしか手はないのだ。

ただ、臣下の者に聞かれるのは少し躊躇いがあった。臣下達にとって父は主君。その父の事を神に問うのは、彼等が抱く父への尊厳に傷をつけてしまい兼ねないからである。

今日は一人で礼拝しよう。少女は内心でそう決断した。

少女の名はパールバティー。18歳になったばかりだ。父はこの国、バティーラの王。つまり彼女はこの国の王女であり、更に言えば親王宣下された内親王であった。

バティーラは立憲君主政の形を取っていた国である。これまでは公正な税制度、公平な裁判が行われ、国内の平和維持を念頭に、まず理にかなった憲法が定められていて、国民の生活も良く保証されていた。それゆえ不平不満の類が比較的少なく、犯罪発生率も抑えられ、平和な国として栄えていた。

それが突如として変わった。劇的な変貌といって良い。良い方向への変化であつたら国民も喜ばしい限りだろうが、人民が落胆する様な変貌をとげたのだ。

他国からの侵略や、災害に見舞われるなどといった、外的要因から民衆心理の荒廃を招いた訳ではない。ある日、民衆に突き付けられた国王からの布告。憲法の廃止、それに伴う立憲君主政から絶対君主政への移行。これにより、バティーラは君主主動の元、政治の推進が成される様になる訳だが、同時にこれが民衆の暗黒時代到来の幕開けとなった。

まず税率が引き上げられた。収入の具合、職の有無は考慮の対称とはならなかった。それどころか、ある種の人間だけが減税の対称となった。則ち国王に付け届けを送った者だ。

高価な物品を献上する者や、そんな物を持ち合わせない貧民階層の者らは自分の娘を国王の側に使えさせようとした。ただどういう訳か、国王の血縁関係者も血縁というだけでは免除の対称とはならなかった。親類縁者は皆渋ったが、仕方なしに税を受け入れるか、贈り物をするのだったが、その一点だけみれば公平かつ公正であると言えた。

税率が上がると共に増加したのは犯罪、特に窃盗の類である。それに際して裁判も行われるのだが、ここでも献上物の有無が巾を効かせる様になった。国王への付け届けのあった犯罪者は罪が軽くなるか、罪を解かれるかするのだ。

そんな不公平な裁決に異を唱える者には厳罰が下された。裁判を取り仕切った者に対して意見しただけであるのだが、それは国王の統治に文句つけた、という事に繋がるという理由で処断の対称となるのだった。

重い租税に悩まされ、犯罪が横行、裁判も公正さを欠き、異を唱えただけで処罰を受ける、とあつては人心も暗くなる一方である。そんな民衆をよそに、バティーラの統治者は贅沢な暮らしを送っていた。

国王サラマガン四世は今年で56を迎える。まだ老け込む年でもなく、若い頃鍛えられた身体は健強そのもので、燃える様な赤い

髪がその印象を一層強めている。眉が太く目も大きいのは意思の強さを表しているようであった。

王宮の自室には豪華な絨毯が敷かれ、名工に作らせたソファや机があり、壁には名のある画家に書かせた絵画がかけている。

朝を迎え天外付きの豪華なベッドの中でサラマガンは目を覚ました。上半身だけ起こして軽く頭を振る。昨晚、商人が寄越した年代物の上等のワインを一本丸々空けたが、二日酔いの気配はない。

横には女が寝息を立てている。貴族から使わされた女である。彼は夜毎事に違ふ美女と寝台を共にした。体の衰えた様子の無い彼は、性欲の衰えも全くみせない。それどころか前にも増して旺盛であるのだ。

サラマガンはベッドから降り立った。よく鍛えられ、引き締まった体にナイトローブを羽織った。

テーブルに並べられたワインボトルを手にとりグラスに注ぐ。赤いビロードの液がグラスに満たされていく。ボトルを脇に置いてグラスに口をつけた。彼の乾いていた喉を潤す。朝、起きぬけの一杯は格別だ。

サラマガンはグラス片手に窓際へ寄ってカーテンを開けた。心地いい朝日が薄暗かった室内に満ちて清々しい気分になる。

この部屋の窓からは遠く王都の街並みを見はるかす事が出来る。彼の統治する街である。彼の政策は犯罪の横行する治安乱れる街へと変貌を遂げたが、それでも繁華な趣きは一向に変わっていない。

彼はふと、遠望していた視線を下に向けた。左右の広大な庭に挟まれて石畳が延びる玄関前に兵士どもが集まっているのに気付いたからだ。慌ただしい様子でそこかしこから集まって来た兵士に部隊長が指示を出している風である。何かの指示が行き渡ると、少数単位に分かれた兵士どもが散っていった。

サラマガンが大して興味をそそられた風でもない目で兵士どものそんな光景を眺めていると、ドアのノックする音と共に

「国王陛下大変でございます」

という声が部屋の外から聞こえてきた。

「どうした、入れ」

サラマガーンの促す声に

「失礼します」

と入って来たのは、王宮管理官のヘイゲルである。

入室した初老程の男であるヘイゲルの目に、ワイングラスを持って窓の外を眺めている主君の後ろ姿が写った。

「兵士どもが騒がしいな」

「気付いておいででしたか」

「その事で参ったのだろ。何があつた？」

「実は内親王殿下のお姿が見当たらなくなったのです」

サラマガーンが振り返って返問した。

「パールがいない？」

「はっ……」

ヘイゲルは事情を説明した。

サラマガーンの娘パールバティーは、起床して食事を済ませた後、必ず王宮の敷地内にある美と慈愛の女神ティアが祭られている神殿へ礼拝に出るのが日課となっている。彼女は今日もいつも通り、女官長と侍従の者を従えて神殿へ赴いた。ただ、今日に限って一人で祈りたいと言い出し、女官長らは拝殿の外で待つ形となった。

礼拝は大体30分程度で終わるのだが、一向に出てくる様子がない。1時間程しても出てこないの、これはおかしい、と女官長らが中に入ると内親王殿下の姿が見当たらない。慌てた女官長らは手分けして神殿内をくまなく探したが見付けず、仕方がないのでヘイゲルの元に報告した。

「それで兵に命じて探させているという訳か」

「真に面目ない事ながら……」

ヘイゲルは恐縮の体である。そうして

「必ずや見つけますのでしばしお待ち下さいますよう……」

と頭を垂れた。

ヘイゲルは主君の逆鱗に触れるであろう事を覚悟したが、意外にもサラマガーンの表情からは怒気の沸き上がってくる様子は見受けられない。そればかりか、事情はわかった、お主に任せるから見付け次第報告に参れ、と穏便に言い渡したのである。ヘイゲルは内心で安堵の溜め息をついた。

そうして拝命した返答をうって部屋を出ていこうとした。そんなヘイゲルを、思案したのちサラマガーンは一旦呼び止めた。

「その女官長はどうしてるか？」

「はっ、内親王様を捜しに回っています…」

「失態の罪は大きい。帰って来次第償わせる。処置は任せる」

「…仰せの通り致します」

主君の部屋を出て廊下を歩くヘイゲルは嘆いた。長年よく使えた女官長をヘイゲルは評価していた。だが処置は任せる、としたが、命でもって償わせる主君は暗に言ってるのだ。

以前なら長年の勲功に免じて命まで取ったりはしなかったであろう。我が主君の事ながら冷淡といわざるを得ない。

内親王様に対してもそれは言える。今少し驚かれるかと思つたが、そんな様子など一向に見せない。

陛下は変わられてしまった、と溜め息をつきたく思つたが、ヘイゲルも命令に背けば自身が危ないのだ。女官長には気の毒だが、殺してしまうしかないのである。

ヘイゲルはひとつ頭を振った。

とにかくも内親王殿下を何とかして見付け出さねばならない。

せっかく穏便に済んだ主君の怒りが、今度は自分に向けられるかも知れないのだ。

それにしても……と、ヘイゲルの思案は方向を変えた。

嚴重なる王宮の警備に抜かりはない。

賊の侵入をゆるして姫様を拉致された、などといった思考をヘイゲルは持ちあわせてはいない。

内親王様はどうしてお姿をくらまされたのだろうか。

その一点が謎であった。

そして今、その所在はどこであろう。

王宮から外へ出るには正面大門か裏門を通らなければならない。そうなれば門番の目に留まって然るべきだが今のところその様な報告は受けてない。だから王宮内を探索しているのだが一向に見付かる気配が無い。念の為王宮の外へ出た事も考慮して探索の手を拡げた方がいいかも知れんな、と思考を進めたヘイゲルは、主君の事は一時念頭から外して歩を速めた。

プロローグ 了

第一話

バティーラは隣国との貿易も盛んな国である。自国の特産品や生産品を売りに商人達が激しく出入りする。ことに王都ベグナスはその中心地でもあり、周辺の国を見渡してもここ程栄華を誇っている都市はない。だが、それも国王の政策転換以降、陰りが見え始めてきたといってよい。

国王が税率を引き上げた事により、都市住民らの生活は苦しくなった。それに際して窃盗を働く者が続発、減税を望んで賄賂も横行、民心の不満は日を追う事に増し、王都ベグナスは暗い空気に包まれつつあるのだった。

別の意味でこの状況を心よく思わない者も一部にあった。盗みを生業とする者らだ。金銭面で圧迫を受ける市民らが窃盗に走る様になり、取り締まりが一層強化される事となった。

ある盗賊なぞ、人の良さそうな老婦人の鞆から財布を抜き取ってやるつもりで近付いて行ったら、前方から巡回の憲兵が数人連れだつて来るのに気付き、内心では慌てつつも素知らぬ風を装ってその場を立ち去ったりした。

そんな具合に街のそこかしこで憲兵の姿が目につく様になり、やりにくくなった世の中に彼等は舌を打つのがだった。

デイルドレンという盗賊もその内の一人かと言えばそんな事は無かった。

彼は要領が良かった。巡回する憲兵との偶発的接触を恐れるからやりにくくなるのだ。偶発を無くせばなんら恐れる必要など無い筈だ、と考えた彼は、まず憲兵の姿から探す事にした。そうして発見した憲兵の後を密かにつけ、巡回行動が仕事に差し触らないであろう事を見計らった後、取って返して事に及ぶのだった。

デイルドレンの盗賊としての仕事場は、主に貴族屋敷である。警

備の者らが時折配置されている貴族屋敷は、邸宅に侵入する事すら困難である場合が多い。しかし、そこいらの一般住民宅より余程財貨を貯えている貴族屋敷は、腕に覚えのあるデイルドレンにとって贅沢な御馳走だ。いくら難しいとはいえ、狙わない手は無いのだ。

念入りに調査し、家人が留守である事を調べあげると、警備の手の薄な時間を見計らって仕事を開始する。案外昼間が盲点である事もある。最近では憲兵が目を光らせているので一旦後をつけ、立ち去るのを見届けた上狙いの貴族屋敷に引き返し、警備の者らの隙をついて敷地内に侵入する。家屋に取り付きさえすれば彼の能力の出番である。

元鍵屋でもあるデイルドレンにかかれば、いかな嚴重なる貴族邸宅の玄関扉の鍵であろうと、ものの数分で開錠してしまふのだ。

後はそつと家屋内に侵入、高価な絵画や彫像の類には目もくれずに財貨を狙う。貴族達の傾向で、寝室に保管されてある事は経験上熟知している。寝室の扉も大体施錠されてあるからこれも開けてしまふ。室内に入ってすぐ物色。発見した財貨を手に入れたのち、直ぐ退散する。半時間とかからず素早く仕事を終える事から付いた彼の異名が

「疾風のデイル」
であつた。

デイルドレン今年25歳。利発そうな若者である彼は、仕事の時も動き易い軽装である。白シャツに皮チヨッキ、その上から藍染めジャケットを着てそこいらの青年と何ら変わらないでたちだ。腰に房付きの長い帯を巻いているが、これも他の青年と変わる所は無い。ただこの帯には細工が施してある。帯を幾重かに巻いてある風に見せかけた作りの実は皮ベルトなのだ。その内側にはポケットがあり、開錠に必要な道具がしまわれてある。一見、何処にでもいる青年の装いを見せるデイルドレンの、これが仕事着である。

「よお、デイルじゃねえか」

デイルドレンが酒場で一杯引っかけている時、声をかけられたの

で見ると、真つ黒の口髭が目につく年輩の男がニヤケ面して近付いて来る。

「何だゴルザか」

「つれねえ言い方だな。しけた面してんじゃねえかよ、ええ？」

体格のいいゴルザがテーブルを挟んでデイルドレンと差し向かいの席につく。年期の入ったイスが悲鳴の軋みをあげた。

「どうしたんだ？ 珍しくしくじったのか？」

「そんなんじゃないよ」

「なら何だよ」

と、ゴルザは尋ねた後、酒場の親父を呼びつけた。そうしてブランドーを注文すると再びデイルドレンと向き合った。

「疾風のデイルらしくもねえ、心気臭い面してるぜ？」

「お前には関係ねえよ」

「わかった」

突然ゴルザは手を打った。

「女だな？」

ぎくつ、というデイルドレンの鼓動が跳ねた音はゴルザの耳には届かなかったものの、ほん一瞬ではあるが動きの止まったデイルドレンを見逃す様な男ではない。ゴルザはニヤリとした方笑みを浮かべて

「凶星だな」

と、指摘してみせた。デイルドレンは胸の内を言い当てられていまましくもゴルザの顔を見たが、やがて観念した様子で両手を上げた。

「ああそうだよ。今朝、えらい女を拾っちまってよ」

「えらい女だあ？」

「ああ。それも飛びっ切りえらい女だ」

「何だそりゃ？」

訝しげに首を捻るゴルザの脇から、店の親父がブランドーのボトルとグラスを運んで来てテーブルに置いた。親父にチップを渡した

ゴルザが直ぐ様向き合ると、デイルドレンは今朝の様子を語って聞かせた。

先日からの調べで、さる貴族が家族共々歌劇公演を観に行く為今日の午前中には留守となる、との情報を掴み、目当ての貴族邸宅にデイルドレンは出向いた。

その貴族邸には警備の者すら配備されておらず、疾風のデイルの異名にたがわず、現着から僅か数分後には侵入をはたし、更に数分後には既に事を終えて邸宅を出た。手に入れた財貨は結構な額で、デイルドレンは意気洋洋と引き上げたのだが、一旦人気の無い通りに差し掛かって角を曲がった途端、走って来た誰かとぶつかった。見ると、白サテンのハイウエストのドレスで着飾った女で、髪に付けてある羽飾りが高貴な印象をもたせている。

気を付ける、との文句のひとつもぶちまけてやろうとしたところ、通りの向こう側から憲兵とはまた違う兵士の一団がデイルドレンに向かって殺到しつつある。

甲冑を纏っているのを見て、正規兵だ、と気付いたデイルドレンは、盗賊の性から脱兎の如く逃げ出した。

本来泥棒の一人や二人の為にわざわざ正規兵団が捕まえにやって来る筈がない。しかし、そんな事を考えるよりも前に体が反応してしまったのだ。

デイルドレンはそうして大慌てに逃げ出したが、暫く走っているうち

「待って！」

という女の声が背中を打った。振り向くと、さっきの女が追い掛けて来る。デイルドレンの逃げ足に及びもつかない女は引き離されて後方で走っていたが、振り向いて驚いてる内には追い付いて来た。

「追われてるの！一緒に連れてって！」

「はあっ！？」

何だこの女は、という疑念は、後方から迫りつつある兵士団を改

めて見た事により、とにかくこの場からトンスラかまさない和不味い事になっちまう、という思いに駆られた事で断ち切られた。

デイルドレンは再び逃げ出した。女の手を引っ付かんで。

後方からは何の事やら聞き取れない叫びを口々に兵士団が走って来る。デイルドレンは逃走用として頭の中に叩き込まれている裏道抜け道を駆使し、しつこく追って来る兵士団をどうにかこうにかまいたのだった。

話終えたデイルドレンは、飲みかけのビールを一息にあおった。

途端に顔をしかめたのは、飲んだビールがすっかり温くなっていたからだ。その様子に苦笑したゴルザがデイルドレンに尋ねる。「それで？ その女というのは今どうしてるんだ？」

「俺の家にいるさ」

「連れ込んだのか？」

「バツキヤロ！ 勝手に付いて来やがったんだ！」

人聞きの悪い奴だぜ。と、思ったデイルドレンだが、それは言わずに尚ゴルザに説明した。兵士の一団をまいた後の様子を。

兵士団の追跡の手から逃れる事が出来た彼等は、三角広場で一息いれた。落ち着きを取り戻すとデイルドレンの思考も回復して活発化する。そうなるというかいの単なる泥棒如き彼が何故、兵士の一団に追い回されなければならなかったのか、という疑問が湧いて来るのだったが、答えは直ぐ側にあるのだ。

乱れた呼吸も落ち着いたデイルドレンは、連れだつて逃げてきた女に声をかけた。

「おい、あんたさつき追われてる、とか言ってたな」

「はいそうです」

「あの兵士はあんたを追ってた訳か」

「そうです」

とんだトバツチリを食ったもんだぜ。デイルドレンは自分の勝手

な勘違いである事は脇にどけて、内心女を恨めしく思った。

ともかく、デイルドレンには関わりの無い事である。どんな事情なのかは分からないが、いずれにせよ、巻き込まれる前にさっさとこの女とはおさらばした方が良さそうであった。

「とりあえず追っ手からも無事逃れる事が出来た訳だし、あんたも今度は見付からん様にすることだな」

そう言ってデイルドレンが、じゃあな、と手をあげて立ち去ろうとした時、女が彼のジャケットの裾をしっかりと握った。

「あ？まだ何か用があるのか？」

「あの……かくまってもらえませんか？」

はあっ！？という、大きな声を出しそうになったが、大きな目を見開いて懇願する女の凝視をまともに直視した瞬間、まずいつ、と悟らざるをえなかった。

女の容姿は飛び抜けた程では無いにせよ、まず綺麗とってよかった。ただそんな外見上の云々はどうあれ、彼女の清んだ瞳がデイルドレンの心情に電撃の様な何かを駆け抜けさせたのは間違い無かった。

デイルドレンは思わず顔を背けた。そんな彼に女は尚、お願いします、という懇願の声をかける。もはやデイルドレンは相手の意に背いた意見を吐ける心境ではない。女の瞳から感じとった気品ともいふべき感覚に捕われてしまった彼は、彼女の願いに頷かざるをえなかった。

「ちっ、わかったよ。好きにしな」

仕方なく連れかえってやるんだからな、といった風の装いをみせるだけが、彼の抵抗の精一杯であった。

「成程。疾風のデイルもついに年貢の納め時って訳か」

話を聞き終えたゴルザがウイスキーのグラスを傾けながら飛ばした毒舌に、デイルドレンも

「まあ、あんたには分からん話だろうな」

と返した。モテた事なぞ産まれてこの方一度もないゴルザは、言葉に詰まった。何とか言い返してやりたくは思ったものの、これといった台詞が思いつかなかったのでやむなく断念した。

そんな事よりその女である。兵士団に追われてたとなると、余程の事をやらかしたに違いない。自分の家にかくまったのなら、素性も事情も聞き出している事だろう、と考えたゴルザがデイルドレンに尋ねた。

「で、何やらかしたんだ？ その女は」

「何でも逃げ出して来たそうさ。王宮から」

「王宮？」

「王女様でいらっしゃるそうさ」

「王女様あ？」

「ああ。あんたでも王女様の名前くらい聞いた事あんだろ？ パールバティー内親王殿下様、だそうさ」

ゴルザは訝しがった。そんな話にはわかに信じれるものでない。だからゴルザは

「何の冗談だ、それは」

と言ったが、なんら不思議ない事である。

しかしデイルドレンにとっては冗談で済まされない体験もある。女から放たれた気品は尋常ではなかった。本当に王女様だとしても不思議無い気品だ。だからといって直ぐ肯定も出来ずにいるデイルドレンは、その事をゴルザに話した上、

「だからこうして酒を飲みに来てんだよ。わかったか？」

と言い放つと、店の親父に二杯めのビールを注文したのだった。

続く

第二話

日が傾いて来たからといって、バティーラの王都ベグナスの活気ある様は衰えをみせない。食料品店や飲食店、衣料店などの商家が店閉まいとなる代わりに、居酒屋や風俗等の類が店を開け、変化するとすれば人の流れが変わるだけだからである。

ただそれも、立憲制以前に比べれば落ち着いたものだ。税率が上がってからの都市住民らの財布の固さは増すばかり。各店舗に訪れる客足も確に減った。客一人辺りの購入価格も低下した。購入数も下降した。目に見えて市民らの購買意欲は低下しているのだ。

日が暮れてきたとあって商人達は各々の店を閉じ始めながら、心のうちで呟く。不景気な世になってしまった。このままじゃあ商売上がったのだ。

そんな中、騎馬の一隊が商店の立ち並ぶ石畳みの通りを通過していく。王宮に配備されている親衛隊である事は、鉄冑の両側面に据えつけられた赤色の羽飾りを見れば一目瞭然であった。

店じまいの手を止めた商人達や行き交っていた通行人達が、親衛隊の為に道を開けて通りの両脇へと身を寄せ、恭しく頭を垂れた。しかし、通過していく親衛隊への彼等の抱いている想いは、立礼の形程恭しくは無い。

それどころか、気取りやがって兵隊どもめ、等といった悪意程の物を抱くのであったが、それもこれも暮らし向きが悪くなった民衆の不満の表れなのだ。矛先は無論彼等の主君だが、ひいては王宮に属している役人や兵士全般に向けられているのだった。

そんな空気を肌で感じている一人が、親衛隊の隊長オスカードルである。彼は馬上から道端でかしまる民衆らを見渡して、その内心では政への不満から、自分達に向けられていた尊厳が薄らぎつつあるのを見通していた。それはつい先程までに嫌という程思い知らされたばかりだからでもある。

オスカードルが部下を率いて街中へ出動したのは、王宮管理官のヘイゲルから、行方の分からなくなっていた内親王殿下が市街の裏通りで発見された、という一報を受けたからである。ただし、内親王殿下は何者かの手に寄つて連れ去られた。犯人は藍色のジャケットを着用した20代程の若者である。直ちに周辺の捜索に当たられ、といった驚くべき内容だったので、オスカードルは部下を集めて急行した。

現着したオスカードルは、内親王殿下を発見した当事者である兵士の一団と協力して部下を分けて捜索に当たさせたが、成果はまったくあがらなかった。それというのも、周辺地域住民などからの目撃情報を得ようとして聞き込み調査を開始したのだが、住民らがいったって非協力的な態度を取ったからであつた。

「そんな奴見かけませんねえ」

「知りませんなあ」

「私には分かりません」

等といった反応をみせる住民らであつたが、真に知らないとあれば仕方ない事ながら、どうも真剣に思ひだそうとする様子がない。連れ去られたというのが内親王殿下である、という事を持ち出したところで、同情の声は挙げれど協力的になる向きはない。

オスカードル自身も捜索にあたつたが、結果は燦々たるものである。黒いジャケットを着込んだ年齢、体格ともに聞いていた誘拐犯の特徴と似かよつた若者を見た時、もしかや、と思つたが、これがただの酔っぱらいであつた。念のため姫様の件を問ひただしてみたが、

「知りやせんよ旦那あ」

と、酒臭い息を吐きかけられただけだつた。引き返して部下からの報告を受けたが、変わらず捜索は難航している。オスカードルは落胆したが、同時に、住民らの態度から国としての有り様が間違つた方向に進みつつあると感じて、不安を募らせたのだつた。

いずれにせよこれ以上の捜索続行は難しい。一旦王宮へ戻つて対策を立て直さなければならぬ。内親王殿下が怪しげな男に拉致さ

れたとあつては、最搜索も急がなければならぬのだ。帰還する道中、繁華街の通りを進みながら、住民らの事は頭から外し、馬上で考えるオスカードルであつた。

そのオスカードルら親衛隊がいまだ搜索を行っている頃。行き着けの酒場で、同業者であり、顔馴染みでもある盗賊のゴルザと分かれて店を出たデイルドレンは、辺りを警戒しつつ自宅へ帰る途中であつた。

ゴルザにパールバティー内親王殿下と名乗る女が自宅にいる事とそれまでの経緯を話したデイルドレンは、店を出る前にゴルザから指摘された。デイルドレンはその女の事で頭がいっぱいになっていて重要な事を失念していたのだ。

本当にその女が内親王殿下であられるなら、一緒に逃げたところを兵士団に見られているという事になる。

「何の用心も無しに、よくぞこの店まで来たもんだ」

そう指摘を受けたデイルドレンは、自身の迂濶さに冷や汗をかいだ。デイルドレンの取った行動は王女様を連れ去った誘拐犯と見なされて何らおかしくない。ゴルザの言う通り、用心せねばならない。そうして店を出たデイルドレンは、果たして想定された事態と出くわす事となつた。

程なくして赤い羽飾りを冑に付けた騎兵の一団が、通りの向こう側から近付いて来るのに気付いたのだ。親衛隊だ、と見受けたデイルドレンは瞬時にわざと歩調を乱して歩き出した。やがて親衛隊の一人が馬を御してデイルドレンに近付いて来る。側まで来て馬を寄せた親衛隊の一人は、ジロジロとデイルドレンの上から下まで見回したのち問いただして来た。

「昼頃に裏街道で誘拐があつた。お主何か見掛けなかつたか？」

その問いかけで自宅にいる女が真に内親王殿下であると確信出来たデイルドレンは、

「知りやせんよ旦那あ」

と、なかばろれつの回らない口調で答えた。追求を避ける為に酔っ払いを演じたのだ。騎兵は尚尋ねてきて、ついには拐われたのが実は内親王殿下である事を明かしたが、デイルドレンは酔っ払いを演じつつ、知らぬ存ぜぬで押し通し、やがて騎兵は諦めて去っていった。

危ねえ危ねえ、とデイルドレンは一息ついた。

問いかけてきた親衛隊の男が隊長のオスカードルである事は彼の知るところでは無い。とにかく気付かれる前に取った咄嗟の千鳥足、酔っ払いよろしくろれつの回らない口調、それに店を出る前、ゴルザから借り受けた黒のジャケットが功を奏して難を逃れたデイルドレンは、尚念入りに千鳥足のまま家路についたのだった。

西の方角にある連山に日が重なって沈みつつある。ブロックごとに連続した長屋式建築の住宅の狭い通路に入った頃には、辺りも大分暗くなってきた。デイルドレンは自宅付近まで無事辿り着く事が出来た。千鳥足の真似事もずっと続けると足への負担は随分大きい。体力も消耗し、酒を飲んだ事も手伝って喉も既にカラカラである。早く自宅に戻って心ゆくまで水を飲みたかったが、体の欲求とは裏腹にデイルドレンの思考は別の経路を辿っていた。彼は先程の騎兵の問掛けから自宅にいる女が王女様であろう事を確信したが、尚考えずにはられない。

とにかく騎兵がわざわざ見知らぬ男に虚言をろうする筈がない。王女様は何者かに誘拐され、兵士達が探し回っているのは間違いない。

かたや自宅にいる女は王宮から逃げ出して来たと言っていた。その逃亡を手助けしたのが他ならぬデイルドレンである。一緒に逃げ出したところを兵士達に見られている。そして現在のところ、王女と自称する女が自宅にて現存し、かたや拐われた王女はまだ見付かっていない様子だから王宮にはいない筈。となるとやはり意味するところはひとつしかないではないか。「どう考えてもあの女が拐わ

れた王女様で、俺が誘拐犯、という事にしかならん」

「はあ、と深い溜め息をついたデイルドレンは、えらい事に巻き込まれてしまった自身を嘆くのだった。

それにしても解せないのは、内親王殿下様ともあるう御方が、何故王宮から逃げ出して来たのだろう点だ。デイルドレンが女から聞き出したのは、名前と立場と追われていた理由だけであって、逃げ出した理由までは聞いていない。帰ったらその辺の事情を伺いたところだな、と考えたデイルドレンは慌てて頭を振った。このままでは本当に誘拐犯として捕まってしまうかねないのだ。事情などどうでもいい。内親王殿下には今すぐにも御引き取り願いたいところである。

自宅はもう目と鼻の先にある。デイルドレンは尚用心して千鳥足のまま、丁重に帰宅なさる様仕向けるにはどうしたらいいものか、と思索した。そうしている内、通路に面した長屋式建築住居群が途切れ、今度は切石積み of 三階立て住宅が街路に面して続いていた。数軒先の住宅玄関の前でデイルドレンは立ち止まる。この一階部が彼の自宅なのだ。

どの様にして王女様に引き取っていただくかの思索はまだまとまっていなかったが、意を決した彼はドアを開けた。そうして入るなりデイルドレンは目を剥いた。掃除もろくにしない乱雑な彼の室内が、光輝かんばかりに綺麗になっていたのだ。

「何だこりゃ!？」

デイルドレンが驚きの声をあげると、声を聞きつけて隣の部屋から彼が匿っている女、すなわちパールバティー内親王が姿をみせた。「お帰りなさい。どうですか?お掃除いたしましたの」

すっかり綺麗になった事で喜ぶパールバティーを呆気となって見たデイルドレンは、次いで室内を改めて見回した。

飲み散らかした酒の空ボトルや、食後そのままほったらかしておいた食器などが姿を消し、その代わりピカピカに拭き清められたテーブル。丸めた紙くずやら、読んだ後適当に放り投げてそのままだ

った新聞やらが無くなって綺麗に磨きあげられた床。その他、ガタついたボ口椅子や埃まみれだった窓枠と水垢のこびりついた窓硝子、汚れきっていた食器棚など、あらゆる箇所に掃除の手が入っていた。「こりやまた見事な…」

外出する前と後ではすっかり見違えた我が家のアチコチを見回して感心するデイルドレンの姿に、パールバティーはニコニコした笑顔を湛えている。

「何というか、わざわざ手間かけさせて悪かったな」

「いいんですよ。お掃除大好きなんですの」

「そうかい？ いや、大したもんだぜあんた」

と言ってから、はっ、とデイルドレンは我にかえた。まずいな。あんた、なんて口きいてしまった。掃除までやらせてしまってるし。慌てたデイルドレンだが、目の前にいるのが本物の王女様という事に実感が湧かないし、また腰の低い対応をみせるので、つい目上の立場をとってしまう。

どうも調子が狂っちまうぜ。

とにかくこの御姫様には、即刻この家から出ていって貰わねば困るのだ。デイルドレンはパールバティーに椅子を勧め、自分もテールを挟んだ席について話をつける事にした。

「あんた…じゃない、お譲さんは本当にパールバティー内親王殿下様であらせられるのですか？」

我ながら妙な言葉使いでもう一度確認を取るデイルドレン。

「はいそうです。でも、どうしたんですか？ 改めてかしこまらなくてもいいのですよ？」

「いやいや、そう言われますが、やはり内親王殿下様に対して無礼な口聞きは出来ませんので」

「本当にいいですね。王宮では窮屈な思いを毎日していましたから、もっと普通に接したいのです。それに、貴方には感謝していますから、いつも通りで構わないですよ」

じゃあ遠慮なく、などという訳にもいかない。どんな事情がある

うと、王女様は王女様である。

どうも本題をきりだすキツカケが掴めない。一旦丁寧な言葉遣いをしてしまうと、出てってくれ、などといった無げな要望を口にするのは躊躇ってしまう。

どうするか、と思索したのち、ディルドレンは自分の方から話を始めた手前、会話が途切れるてしまう事にはつの悪さを覚え、話の繋ぎとして王宮から逃げたした理由を伺ってみた。すると明るかったパールバティの表情がみるみる曇ってきた。どうやら余程の事があつたのであろう。

「どうしたんだ？ 何があつた？」

というディルドレンの口調も、先程の礼節さが無くなっている。

「見てしまったのです……」

「見た？何を？」

「恐ろしい魔導士が父の……父の魂を奪ってしまったのです」

「魔導士……！？」

ディルドレンは絶句した。パールバティの小柄な体がわなわなと震えだし、やがて手で顔を覆った。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4027b/>

盗賊と王女の怪奇譚

2010年10月21日22時33分発行